

日本大学文理学部

史学科同窓会

會報

第五号 (通号八二号)

令和二年三月三十一日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二二五十四〇

日本大学文理学部史学研究室内

℡〇三三五三二七九二一八

史学科左見右見

学科主任 山本 孝文

元号が令和と改まりました。しかし改元がもはや時代・社会の転換点を反映するものでなくなつて久しく、むしろ安易に昭和の世、平成の世：などと元号中心に時代を区切つて歴史を説明しようとする風潮には気をつけるべきでしょう。それより、現代を生きるわれわれはもつと切実な問題に直面しています。天災である自然災害と、人災である昨今の政治状況が、この先、歴史的にどのように評価されていくのか関心を傾けざるを得ません。

このところ、日本では自然災害について常に考え続けなければならぬ状況になっています。二〇一九年は特に台風一〇号、一五号、一九号が猛威を振るい、それに伴う土砂災害や浸水被害により、避難所や仮設住宅での不便な生活を余儀なくされている方々が多くいます。さらに、天災は一度終息すればそれで済むというのではなく、今般の台風のように何度も同じ場所に追い打ちをかけるように被害をもたらすという

こともある非情さを持っています。

本学は全国から学生が集まるマンモス大学で、史学科に所属する学生の出身地も北は北海道から南は九州・沖縄にわたっており、さらにアジアをはじめ諸外国からの留学生も多く通っています。自然災害は各地で散発的におこり、その影響は広範にわたることも多いため、各地から被害の報告が入ると、所属学生本人とともにその実家・御家族の安否も気遣われます。さらに全国各地に散らばつて活躍している卒業生たちにも思いが至ります。学生およびその御家族の人的・物的被災状況に関しては学科・学部としても随時情報を収集し、通学・修学が困難になるような状況においては、学部として奨学金制度を設け、学科としても支援と配慮を行っています。今後、都心部での大規模災害なども決して非現実的とはいえなくなりつつある状況で、対策と備えが急がれます。

近年の災害に対する関心の高揚を受け、一般の方を対象とした文理学部の公開講座において、史学科の担当で「災害の歴史、災害と歴史」というテーマのもと、日本と世界の各時代の災害と人間の歴史の關係に関する連続講座を開催しました(最終頁参照)。二〇一一年の東日本大震災とその後の社会変化を考えたとき、自然災害というものが、革命や戦争に劣らず国や地域の歴史展開に大きく関わっていたであろうことに思い至らずにいられません。しかし、その内容が歴史教科書などに掲載されているのはごくわずかで、歴史研究・教育に携わるわれわれでさえも、実はあまり意識していない部分があります。災害と歴史の關係が、これからの歴史学の大きなテーマとして存在感を強めていくことは疑いなく、その主題を突き詰めていくことで、その成果が人類の未来に益することにもなるでしょう。その意味で、歴史学的観点からの災害へ

の眼差しを、われわれは常に備えておくべきだと思います。

二〇一九年の台風被害が徐々に顕在化するさなかの二〇月六日、史学科にも激震が走りました。これまで長きにわたって研究・教育・組織運営すべての面において学科と大学を支えてこられた中村順昭教授が、一年間の闘病の末、六六歳で他界されました。春には一度職場復帰を果たされ、今後も引き続き御指導いただけるものと喜んでいた矢先のこと、残念でなりません。御自身を主張されない控えめなお人柄ながら、発せられる言葉には常に重みがあり、その適確な御判断と御指摘に幾度救われたか知れません。また、本学の御出身でないにもかかわらず、史学科同窓会の一員としてその発展に多大な貢献をされました。学科にとつてまさに痛恨の損失であり、大黒柱をなくした喪失感言葉にできません。

しかしいつまでも下を向いているわけにはいかず、絶望的な災害から都度立ち上がってきた人類史に倣い、われわれも中村先生の御尽力を継承し、気持ちを新たに学科の発展と大学の復興に臨むことを約束したいと思えます。

今号には、中村先生と親しく過ごされた先生方や、薫陶を受けた方々に追悼の文を頂戴しております。中村先生のお人柄に今一度触れるよすがとしていただければと思えます。

訃報

史学科教授 中村順昭先生は、令和元年二〇月六日、逝去されました。哀悼の意を表し、謹んでお知らせいたします。(享年六六歳)

〔中村先生を偲ぶ記〕

無常の道へ赴かれた 中村順昭先生へ

関 幸彦 (史学科教授)

「安心」「安定」の評語を付すとすれば、中村先生ほどそれに見合う方も珍しい。激高せず、感情の起伏をコントロールできる数少ない方だろうと。家庭人として父の顔、夫の顔はあるにしても、その評はおそらく動かないかもしれない。「棺ヲ蓋イテ事定マル」とは人間の裏・表を揶揄した警句なのだろうが、まったく、そんな語句とは無縁でブレのない人生を送られたと思う。その言動を見る限り、媚びないという点では一貫していた。是々非々の人だったと思う。こんな言い方をすれば照れた破顔で「そんな上等な人間じゃありません」の声が黄泉から聞こえそうだが…。素直な感想である。

先生との出会いは文部省文化庁時代以来だから、かれこれ三十有余年になるかもしれない。文化庁に勤務され研究者として研鑑を積まれ、先生は日本大学に移られた。その間当方も別の大学に移り、十数年前に本学史学科の同僚として再会することになった。赴任が決まったおき、中村先生と最初に酒を二人で桜上水駅の居酒屋でかわした。酒も程々に強

く、以来幾度か酒宴をともしした。世代も近く、かつ研究室も隣同士の好みで会議や授業、OB会の件などいろいろとお教え頂いた。

科内会議あるいは学会での諸種の発言にはタイムリーで、簡にして要を得た内容に感心させられたこと再三だった。大局を見据えた発言は重みがあった。声のトーンから来るのだろうか、存在感があった。時流に媚びないという点ではタバコをやめることはしなかった。その点ではなにか冗談ながら節を守り抜いたともいえる。

動揺したところが無かった。そんな印象だ。胆のすわり方という面で、大将的風格の持ち主だった。

学位論文を含め、吉川弘文館から主要著書三冊が上梓されている。研究者として程良い業績だろう。最後の『橘諸兄』（人物叢書）は渾身の力作である。おそらく最期の力をふり絞り病床で校正されている姿が目に見え、重厚な筆致で書き得た同書は、奇を衒う表現が少なく、まことに研究者としての節度を守り抜いた手堅い仕事だと推察できる。

昨年秋以降入院され、年明に復帰された時にも、副作用も感じさせない様子だったが……。再入院から数か月後、不帰の客となられてしまった。本学の史学科はもとより古代史学界の今後にとって惜しい人材を失ってしまったことは残念の極みとしかいえない。齢七旬まで数年を残すとはいえ、研究者としてのこれからの考えたととき残念至極だろう。

（合掌）

中村先生の思い出

武廣 亮平（昭和六〇年度卒）

中村順昭先生が文理学部に着任されたのは一九九四年であった。当時私は史学科の助手として勤務しており、履歴書などの書類を取り扱ったことを記憶している。史学科は長らく日本古代史の専任教員が欠員状態であったこともあり、少々大袈裟かも知れないが「やっと日本古代史も日の目を見る」と心躍るものがあつた。

大学・研究会などで先生とのお付き合いが特に多くなったのは、十一年前に北海道から帰京してからであるが、実はその前後に東京での再就職について大変お世話になった。話の性格上詳細は控えるが、先生のご尽力なくして現在の私はいなかったことだけは間違いない。二〇一〇年の歴史学研究会大会の会場で、様々な事情から東京に戻りたいと考えている事を相談したところ、「できる限り力になりましょう」という言葉をいただいたことを今でもよく覚えている。当時藁にもすがりたい心境であつた私には大変心強かった。

日本大学経済学部で職を得て二年目に、中村先生がサブタイカルで一年間授業を休講にするため、古代史のゼミを代講してほしいとの要請が史学科からあり、お世話になった恩返しという意味も込めて二つ返事で承諾した。夏のゼミ旅行には先生も参加され、暑さでバテ気味のゼミ学生を尻目に、灼熱の奈良盆地をエネルギーギッシュに歩き回っていた。見学先の資料館などでは時折展示品や解説に真剣に見入る姿もあり、そこに研究者としての「食欲さ」も垣間見た気がした。ゼミの代講は一年だったが、次年の伊勢へのゼミ旅行にも参加させていただき、いずれも普段

とはまた違った中村先生の楽しそうな姿が多く印象に残る時間を過ごした。

なおサバティカル期間中に先生が仕上げた(と思われる)作品が『地方官人たちの古代史』(吉川弘文館)である。中村先生の研究テーマである古代の下級官人研究の成果について、一般の読者も意識して書かれたものであるが、この本を読み進めると、丁寧な史料解釈に裏付けられた明解な記述に混ざって、「私はこう考える」という先生には珍しい自己主張を前面に出した文章も散見する。その真意をお尋ねしたところ、これから本格的に研究に取り組んでみたいテーマであるとのことのお答えであった。つまり今後の研究への所信表明といえるが、いずれも日本古代史の重要な課題であり、それに対する先生の研究成果を目にすることが叶わなくなったのは何とも残念である。ただそれを誰よりも悔やんでいたのは先生ご自身であることは言うまでもない。中村先生に公私ともにお世話になった者の一人として、今後何らかの形でその課題にアプローチしたいと思う。

同じ日本古代史を専攻していた中村先生は、私にとって非常に頼りになる「先輩」のような存在であった。冒頭にも述べたように、私が助手の時に先生が着任されたということもあり、指導教官でもなく同僚でもないという微妙な関係であったが、それが適度な緊張感にも繋がった。ただ個人的には教えていただきたいことがまだまだ沢山あった。先生の淡々とした辛口トークが聞けなくなってしまうのも寂しい。改めてご冥福をお祈りしたい。

中村先生との思い出

八馬 朱代(平成九年度修了)

中村先生に最初にお会いしたのは、私が博士前期課程の時に修士論文の副査としてご指導していただいた時でした。その後、博士後期課程に進学して、先生のご指導を受けるようになり、そのまま研究の道に入りました。先生は寡黙で余分なことをほとんど話さない方でしたが、時々発せられる発言や質問は優しさの中に鋭さがあり、いつも私の不足している視点や研究のつめの甘さを指摘されるのもっと精進しなければと感じさせることが多々ありました。しかし、大学院のゼミ入宿では、飲み会で日本酒の聞き酒セットを注文して、みんなで日本酒の味について批評したり、バナナの串カツを注文するなど、意外に遊び心のある先生で、ゼミ生にとってそんな姿を拝見することも合宿での楽しみの一つでした。

以前に、私が研究会で報告した時に、他の研究者の方からの厳しい質問で落ち込んでいた際に、先生は学会報告の時に他の研究者から否定的に言われた時にショックを受けないのですかと質問したところ、先生はその人はわかっているいなと思っているから気にしないとお答えになりました。それを聞いて、先生の研究に対する揺るぎない自信に勇気づけられました。自らの研究への自信と精神力の強さは私のあこがれです。先生は常に私を気にかけてくださり、困った時や研究で行き詰まっている時には的確な助言と私の進むべき方向を示してくれる先生でした。一つ悔やまれることは、先生から昨年に学位論文はなるべく早くに出版した方が良いですよとのアドバイスをいただいたものの、すぐに出版すること

は厳しかったので、二、三年かけて出版したいとお伝えしたのですが、この約束を果たせなかったことが、非常に心残りです。先生の指導と応援を糧に、これからも研究に励んでいきたいと思えます。先生との二三年間の思い出は私にとってどれも大切なものです。もうお会いできないのはとても寂しいのですが、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

厳しさと優しさと含み笑いと

堀川 徹（平成一九年度卒）

中村先生について、おそらく多くの方が「温厚」「優しい」という印象をもっているのではないのでしょうか。しかし私はそれに加えて、非常に厳しいという印象ももっています。研究指導の場では常に厳しい意見「しか」もらえなかったからです。論文の草稿を見てもらった際に、「先生、論文はイケてましたか？」と聞くと、いつもの口調で「イケてません」と一刀両断され、長時間の指導を受けることがほとんどでした。大学院を満期退学する直前くらいだったかと思いますが、お酒の席で次のようなやり取りがありました。

「先生、いつも僕の研究にはダメなところばかり指摘しますが、良いところはありますか？」

「私（中村先生）はあなたの研究に対して良いところはあってもありません。言ってしまったらあなたの研究はそこで終わってしまうでしょう？だから常に悪いところを探して指摘しています。」

「でも先生、〇〇さんには優しいじゃないですか。なぜ僕にはそんなに厳しいのですか？」

「私も、人をみていますから」

「いつか、先生が反論できないような研究をすればほめてもらえますか？」

「…（含み笑い）」

その時の中村先生の含み笑いは、「できるものならやってみなさい」という厳しさと、研究を見守ってくれる優しさが同居していたような気がします。単に厳しいだけでなく、私という人間を理解したうえで指導し、見守っていただいていた優しい一面もあったことにその時気づきました。

結局中村先生が反論できないような研究はできずじまいでしたが、それでも諦めが悪い私は、中村先生が反論できないような研究をすることを目標としています。それを達成することが先生の学恩に報いることだと思っています。数十年後、もし私が先生と再会することがあれば、あえてもう一度聞いてみたいと思います。

「私の研究はイケてますか？」

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

重厚でユーモア―中村先生との思い出

吉田 修太郎（平成二〇年度卒）

中村先生の印象を問われると、「面識のある方の多くは、「重厚」・「ユーモア」といったキーワードをあげるのではないのでしょうか。

重厚は多くの方がイメージする中村先生像だと思います。あまり多くのことを語らずも低く重いトーンで理路整然と話される姿は、説得力に満ちまさに重厚で正統筋な学者そのものでした。

そういった他者が近づき難い一面を持ちながらも、ユーモラスな面もありました。ゼミ旅行では、アイスの天ぷらをはじめ、誰よりも率先してその土地の下手物(?)を食し、ゼミ飲みでは、初恋サワー(大学近くにある居酒屋たつみの名物サワー)を飲みながら学生の恋愛にアドバイスを述べる一面もありました。

自分の思い出としても、この二つのキーワードに関するものが多いです。研究では、納得がいくまで質疑応答を繰り返し、夕方から二〇時近くまで親身に面倒をみていただいたことや、論文の査読をお願いすると、必ず一・二週間で先生の手書きのメモが入った論文が返ってきました。あまり多くのことを語らない先生ではありましたが、そのやり取りを振り返ってみると、実に熱心で面倒見の良い先生だったと思います。そんな真面目な研究の話の中でも、随所にちよつとしたジョークや言葉遊びを楽しむお姿もありました。

史学科のアウトロー(?)たる自分が、曲がりなりにも九年間(博士課程後期まで)大学に在籍することができたのは、先生に「重厚」・「ユーモア」、さらにできの悪い自分に対しても親身になって面倒をみてくれ

た「寛容」といった面があったからだと思います。そんな先生の恩に報いるためにも、論文を書き続けようと思います。中村先生はそんな自分の論文を、きつと天国でも重厚な趣でユーモアを交えながら論評されることでしょうか。

中村先生を偲んで

菅野 聖美（平成二八年度卒）

中村先生と初めてお会いしたのは、学部二年の基礎実習でした。私は通信教育部から文理学部に転籍しており、演習形式の授業を取ること自体が初めての経験だったので、毎回緊張したことを覚えています。初めて先生とお話しをさせていただいたのは、ある漢字の読み方でした。今振り返ると、自分で辞典で調べると言ってみたくらいですが、そんな些細なことでも先生は優しく教えてくださいました。文理学部に来て、不安でいっぱいでしたが、そこで先生に救っていただきました。また、その年の後期の文化祭の時期だったかと記憶していますが、日本史特講が六限に補講があり、他の受講者が現れず、マンツーマンという贅沢な講義を受けたという思い出もあります。ここぞとばかりに普段聞けないようなことを質問しました。

卒業論文のテーマを決める際、非常に悩み、先生にご相談したことがあります。古代史の中で、そして授業を受けてきた中で興味を持っているのは「女帝」。しかし、歴史好きになったひとつの要因である地元の白鳥伝説が伝わる神社、ヤマトタケルノミコトについても書きたいと思っていることを伝えました。すると、先生から「史料が少なくても、卒

中村順昭先生業績目録

著書

- 『律令官人制と地域社会』吉川弘文館 二〇〇八年七月
『地方官人たちの古代史』吉川弘文館 二〇一四年一〇月
『橘諸兄』（人物叢書）吉川弘文館 二〇一七年七月

論文

- 「平城京—その市民生活」『歴史と地理』三三四号 一九八三年
「律令制下における農民の官人化」（土田直鎮先生還暦記念会編『奈良平安時代史論集』上巻）吉川弘文館 一九八四年
「奈良朝写経と写経生」『月刊文化財』二五七 一九八五年
「律令制下の国郡衙の職員構成」（黛弘道編『古代王権と祭儀』吉川弘文館 一九九〇年）
「奉写一切経所の月借錢について」『日本歴史』五二六号 一九九二年三月
「長岡・平安遷都の役夫について」（篠山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下巻）吉川弘文館 一九九三年九月
「平城京の京戸について—天平五年右京計帳手実をめぐって」（日本大学人文科学研究所『研究紀要』四九号 一九九五年三月）
「律令制下の国府とその職員」『国史学』一五六号 一九九五年五月
「奈良時代の下級官人と位階制」『万葉文学』四号 一九九五年九月
「郡家の所在と郷の編成」『史叢』五四・五五合併号 一九九五年十二月
「律令官司の四等官」『歴史科学と教育』一七号 一九九八年一〇月
「造東大寺司の「所」と別当—天平宝字六年造東大寺司告朔の考察—」（皆川完一編『古代中世史料学研究』上巻）吉川弘文館 一九九八年一〇月
「律令郡司の四等官」（日本大学人文科学研究所『研究紀要』五六号 一九九八年一〇月）
「律令官人的編成と地域社会」『歴史学研究』七二九号 一九九九年一〇月
「地方社会における位階」（奈良文化財研究所『銚帯をめぐる諸問題』二〇〇二年三月）
「光明皇太后没後の坤宮官—その写経事業をめぐって—」（笹山晴生編『日本律令制の展開』二〇〇三年五月）
「愛智郡封戸租米の輸納をめぐる郡司と下級官人」（吉村武彦編『律令制国家と

論はやりたいと思うことをテーマにした方が後々詰めなければいけない時のやる気が違いますよ」とアドバイスをいただき、後者のテーマに決めました。ここで前者に決めていたら、大学院進学もなかったと思うので、私にとってターニングポイントでした。

大学院に進学してからは、学部生の時以上に先生にご迷惑をおかけしていました。大学院以外に他大学の通信で小学校教諭の免許取得を目指していたため、スクーリング授業やその授業のフィードバックで授業を欠席することも。大学院二年目の時にはよく体調を崩し、泣き言を漏らしてしまったこともあります。先生は優しく励ましてくださり、何とか持ちこたえることができました。歴史も研究したいが、小学校教諭にもなりたいたいという我儘な学生を容認していただいたこと、心の支えになっていたいただいたことに本当に感謝しております。

結果的には、学術論文や外部の学会で発表することはできませんでしたが、また、修士論文も先生に「卒論からあまり進歩がなかったですね」との評価をいただいたので、これからまだ時間はかかるとは思いますが、研究を進め、史叢で発表することが中村先生へのご恩返しと考えています。

学部生からの先生とご一緒した五年間は私にとって何にも代えがたい時間でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

「古代社会」 塙書房 二〇〇五年五月)

「八世紀の武蔵国司と在地社会」(『史叢』七四号 二〇〇六年三月)

(以上の論文は『法令官人制と地域社会』所収)

「相模と武蔵」(『季刊明日香風』二〇号 一九八五年)

「鑑真―その来日の意義」(『歴史と地理』五二四号 一九九九年六月)

「大伴家持と越前・越中の在地社会」(『万葉古代学研究所年報』五号 二〇〇七年三月)

「刀禰と舍人」(『史叢』七七号 二〇〇七年九月)

「鑑真東渡及其影響」(『唐都学刊』二三卷六号 二〇〇七年十一月)

「新羅から日本にもたらされたもの」(『日本大学通信教育部紀要』二二号 二〇〇八年三月)

「国司制と国府の成立」(『古代文化』六三卷四号 二〇一二年三月)

「不改常典と天智天皇の即位に関する試論」(吉村武彦編『日本古代の国家と王権・社会』塙書房 二〇一四年六月)

「国司の館と宅」(『本郷』一一四号 二〇一四年二月)

「八世紀における国の分立と廃止」(『史叢』九二号 二〇一五年三月)

「長屋王―長屋王家木簡の世界から―」(佐藤信編『古代の人物―奈良の都』清文堂 二〇一六年四月)

「地方官衙の役人―駅家を中心に―」(鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編『日本古代の道路と景観』八木書店 二〇一七年五月)

「国師と地方寺院」(『古代東国の地方官衙と寺院』 二〇一七年八月)

「古代武蔵国府の地域史」(『日本歴史』八三六号 二〇一八年一月)

「律令制成立期の国造と国司」(佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館 二〇一八年三月)

「高麗福信と武蔵国」(高橋一夫・須田勉編『古代高麗郡の建郡と東アジア』高

志書院 二〇一八年五月)

「北条秀樹著『日本古代国家の地方支配』(『日本史研究』四七〇号 二〇〇一

年一〇月)

「須原祥一著『古代地方制度形成過程の研究』(『歴史学研究』八九五号 二〇

一二年八月)

「松原弘宣著『日本古代の支配構造』(『史学雑誌』一二四編八号 二〇一五年

八月)

「磐下徹著『日本古代の郡司と天皇』(『歴史評論』八一四号 二〇一八年二月)

概説書・教科書

日本大学通信教育部『日本史特講Ⅰ』二〇〇一年四月(共著)

佐藤信編『古代史講義―邪馬台国から平安時代まで』筑摩書房(ちくま新書) 二〇一八年一月

(第4章「飛鳥・藤原の時代と東アジア」執筆)

辞書・辞典など

『国史大辞典』吉川弘文館 一九七九年三月(項目執筆)

『日本古代史年表』上 東京堂出版 一九九三年九月(分担執筆)

『新版 日本史辞典』角川書店 一九九六年二月(項目執筆)

『日本史広辞典』山川出版社 一九九七年二月(項目執筆)

『日本史辞典』岩波書店 一九九九年一月(項目執筆)

(文責 武廣 亮平)



写真

中村順昭先生

同窓会講演会参加記

三月二日(土)の史学科同窓会では、初の試みとして講演会がおこなわれました。今回は、当同窓会副会長の横山則孝氏(もと商学部教授)が講師をつとめ、「江戸こぼれ話」と題し、三つのトピックを提供されました。

最初のトピックは、「忘れられた將軍候補松平清武」です。清武は六代將軍・徳川家宣の弟であり、数奇な運命を経て、大名(越智松平氏)に取り立てられ、七代將軍・家継(家宣子息)が夭折した際には、八代將軍の候補と目されたものの、結局は紀伊家の吉宗が將軍家を相続したことなどを論じられました。

二番目のトピックは、「実は一人ではなかった水戸黄門」です。「水戸黄門」といえば、時代劇の影響で、水戸徳川氏の二代・光圀の別名と捉えられがちですが、じつは水戸家の歴代当主の大半が任官した中納言の唐名(日本の律令制官職を中国の官称にあてはめる習慣)が「黄門」だったことを指摘されました。また、徳川御三家の概念(尾張家・紀伊家・水戸家か、將軍家・尾張家・紀伊家か)や、水戸家に將軍家の継承権はあるのか否か、という問題について、ご自身の辞典の項目執筆の経験などから解説していただきました。

最後のトピックは、「江戸時代、一八〇〇年代になるまで天皇はいなかった」です。現在でこそ、歴代天皇は「〇〇天皇」と呼ばれています。江戸時代には「〇〇院」と呼ばれており、十九世紀初頭に光格天皇(近代以前に讓位をおこなった最後の天皇。本年度に実現した生前退位をめぐる議論の中で注目を集めた)が儀礼・先例を再興する朝廷改革の一環として、天皇号を復活させたという事実を紹介していただきました。



写真
史学科同窓会講演会にて

いずれも通常の授業では、なかなか接することができない事柄であり、横山氏のベテランならではのチョイスでした。歴史学の役割の一つは、広く関心を集められる話題の提供です。卒業生の皆様には、今後も同窓会をその場としてご活用していただきたく存じます。

(報告者・文責 小川 雄)

〈研究室短信：「韓辺外」調査について〉

松重充浩（史学科教授 東アジア近現代史）

加藤直人先生が研究代表を務められる科研「基盤研究(B)」「清代『内陸アジア交易ネットワーク』の形成・展開と文化変容における歴史的特徴の解明」の研究グループは、二〇一九年九月七日～十三日、中国吉林省を中心とする現地調査を実施した。筆者も、この現地調査に研究グループの一人として参加させていただいた。本稿では、この現地調査の中から、九月九・十日の二日間に亘り調査を実施した、かつて「韓辺外」と呼称された地域について簡単な紹介を行い、併せて、現在の史学科東洋史（東アジア近現代史担当）スタッフが持つ問題関心の所在の一端も紹介し「研究室短信」とさせていただくこととしたい。

「韓辺外」と呼称された地域は、概ね現在の吉林省吉林市東南部に位置する樺甸市夾皮溝鎮一帯を指す。同地が、「韓辺外」と呼称される所以は、清代末期に父親に連れられ山東省登州から中国東北地域に移住してきた韓憲宗（一八一三？～一八九七）が、十九世紀半ばに夾皮溝にあった金鉱を掌握したことを契機に、その強い経済力と一定の軍事力を背景に、清朝統治から自立する様相を呈する形で同地域における実質的統治を行ったことによる。即ち、「韓辺外」とは、「韓」氏によって支配される「辺外」（柳条辺外）の地というほどの意味である（同時に、「韓辺外」は韓憲宗の別名ともなっている）。なお、この韓家は、韓憲宗の孫である韓登挙（一八六九～一九一九）、韓登挙長子の韓綉堂、韓登挙甥の韓錦堂へと家督が継承されていくが、韓登挙晩年以降、同地域に対す

る自立的支配力を急速に低下させ、一九二〇年代末以降は数ある地方有力者の一人となっている。

さて、今回の現地調査は、この「韓」氏の足跡を追いかける形で進められた。具体的には、韓憲宗が修築したとされる善林寺趾、金鉱跡と労働者居住地域跡、現在も採掘が行われている金鉱（中国黄金集団夾皮溝礦業有限公司）、等々を対象に踏査と聞き取りを行った。本稿で、その内容を詳述する余裕はないが、その成果から、浮かび上がってくる「韓辺外」研究の意義を示すと、以下の通りとなる。それは、筆者の現状における問題意識の所在を示すものともなっており、本稿の「研究室短信」としての責めを塞ぎ、本稿を終えることとしたい。

「韓辺外」の歴史は、十九世紀後半の清朝末期において移民の増大に象徴される高い流動性を見せるに至った東北地域社会が、清朝統治を相対化しつつ如何なる地域秩序の構築を指向したのか、更には、それが帝國主義列強や中華民国地方政府との相互連関性の中で、如何なる新たな地域秩序に帰結するものだったのかを検討する上で、好個な事例の一つを提供するものとなっている。それは同時に、中国の伝統的社会秩序が国際的契機を孕んだ新たな流動性に晒された際に、如何なる歴史的蓄積を如何に運用することで新たな均衡へ辿り着こうとするのかという、東アジア世界で極めて大きな影響力を持つに至った現代中国社会が直面している課題を考察する上での歴史的事例を提供するものともなっていると言える。その意味で、「韓辺外」研究は、現代東アジア世界における私たちにとって、今日的意義を有する検討対象ともなっているのである。（了）



写真

中国黄金集团夾皮溝礦業有限公司選鉱場で聞き取り調査をする筆者

史学科の昔と今 〈恩師探訪〉

——今回の「恩師探訪」のコーナーでは、法学部の教授として教鞭をとられ、当学科でも長期にわたり非常勤講師を務められた、北原章男先生にお話をうかがうことにしました。先生は、日本近近世史を「専門」とされ、多くの学生・院生のご指導にあたられました。本日は、お忙しい所をありがとうございます。まずは、入学されたころの学科の様子は怎么样了か。

昭和三三年四月の文理史学科の入学で、私のすぐ上には鈴木國弘・三輪嘉六、同期に澤田、すぐ下に竹石、横山の諸氏がいました。教授陣には石田幹之助（東洋史、『長安の春』の名著あり）、和田清（東洋史）、龍肅（鎌倉時代史）、山中謙二（西洋史）の四先生がいましたね。当時、助手として在任され、のちに学士院賞を受賞された荒居英次さんもあわせ忘れることが出来ません。古文書のご指導を頂きましたね。正月などは、お宅にお伺いして美味しい江戸前のおすましをご馳走になり、いまになつかしく想い出されますね。

——先生たちのエピソードとして特別記憶に残っていることはおありですか。

そう言われれば、岩生成一先生の蔵書の一件はよく覚えて 있습니다ね。先生は南洋日本人町の研究や朱印船貿易史の研究がおありです。東京大学を定年になり、三四年に史学科にお見えになりました。その当初に先生は研究室の蔵書があまりにも貧しいのに驚かれましたね。図書館

も同じような状況で失望されたようでした。これでよく大学院に日本史の過程の設置が許可されたのだと眩かれましたね。それから龍先生の『吾妻鏡』の演習のおり、研究室の『漢和辞典』の必要箇所が半分引き裂かれているので唾然としたことも覚えています。当時の研究室は、それをそのままにしている有様だったので、『尊卑分脈』だって国文科に借りにいかにざるを得なかったことです。とても恥ずかしい気分でしたよ。

——それは、何ともつらい体験でしたね。その他で想い出されることは何かありますか。

石田先生の場合は授業の中で、勉強したい人は東京大学を紹介しませんが、といわれた記憶があります。これは日本大学の学生としては、とても悲しいことですよ。このように当時の先生たちにとっては蔵書の整備云々には、さほど関心がなかったのかもしれない。それに比べて現在の研究室は、幾分よい環境にはなっていますか。

——試験のことなんかで想い出すことはございますか。

岩生先生の試験で、当初はレポートをと考えられていらしたようです。ただし、自分が刺激になるレポートを提出してほしいが、そのための資料が大学に不足している以上、レポートは無理だから試験になった。こんなことも想い出されますね。これもまた今の学生さんたちには想像もできないことかもしれませんね。

——卒業にまつわる話としては、どんなことがありましたか。

そうですね、当時、卒業時には、研究室に記念品をおいていく習慣がありました。茶器とか傘など日頃必要なものですね。私達はあまりの情け無さから、方針を替えて、十巻前後の「史料集」を残していくことにいたしました。いまになっては正確な書名は失念しましたが、幕末の遣米使節に関するものであったかと思えます。このことはその後の卒業生たちの先例となったようで、誇るべき行為でしょうか。

(質問者・文責 関幸彦)

〈現役学生の声〉

文化財ゼミナール(平野卓治先生・文化財学)

史学科四年 鈴木英明

——今回は文化財学の平野卓治先生のゼミナール紹介です。

平野先生は大塚先生の後任として、平成三〇年度に着任されました。文化財ゼミについてお伝えいただけますか。

(鈴木) 文化財の平野ゼミは、二学年併せて二三名です。ちょうど良人数で、それなりに発表する機会にも恵まれているようです。

——ゼミの特徴はどんなところですか。

(鈴木) 文化財ゼミの大きな特徴として、文化財というジャンルの中で、各々が年代や地域に縛られず、幅広い分野の文化財を研究題目にしているという点だと思います。原爆ドームや東大寺などの建造物から、肉食禁忌や拷問など文化的なものまで多岐にわたります。私は、もともと

と卒論で取り上げたい文化財が決まっています。刀剣や甲冑。元寇防塁、城郭など多様な文化財ジャンルの話が好きです。その後の歴史散策など趣味に繋げることも多々あり、とても興味深くゼミに参加させていただいています。また、各々卒論題目が大きく異なるため、お互いの報告を違った見方から見ることで、質問や感想など視野の広い意見交換が行われている印象があります。

——ありがとうございます。ゼミナールのスタイルはどんな感じですか。

(鈴木)ゼミが始まってから数回は、平野先生による文化財の講義があり、その後、一時間に約二人のペースで報告を行っています。勿論、報告側も聞く側も真剣に取り組みますが、和やかなゼミの雰囲気があり、リラククスしながら報告を進めていけるゼミだと考えています。報告後の質疑応答では、ゼミ生からも、研究の仕方、表現方法、自分の意見の入れ方など、様々な意見も出され、刺激が与えられます。私自身、先行研究の中に、自分の考え等をうまく表現できていない点が課題として見つけられましたから、とても役にたちました。

——平野先生の性格や雰囲気を教えてください。

(鈴木)ゼミの特性上、各自幅広い卒論内容なのですが、平野先生は学生の卒論課題を尊重してくれます。とても丁寧に対応していただいています。時には叱咤激励をもらったりと、温かい人柄ですね。また、チコちゃんの名セリフを多用し五歳にもどっていたり、普段からジョークで場を和ませ、とてもユーモアのある一面も持っています。

——最後に、何かメッセージがあればどうぞ。

(鈴木)文化財ゼミを通して、卒論課題だけにとどまらず多くの文化財に関する知識など多くの事を学ぶことが出来ました。文化財ゼミに所属している事に誇りを感じます。ラグビーワールドカップ風にいえば、文化財ゼミONE TEAMで卒論に向け頑張っていきたいと思えます。

(質問者・文責 関 幸彦)

近況通信

○大学卒業後、中学校教育に三八年間・家庭教育指導に四年間携わりました。現在は、専業主婦として、孫が喜ぶ食事作りに励んでいます。そんな中、我が家は台風十五号で被災しました。被災ゴミの処理をしているうちに、かねてから気になっていた山積みの不用品の処理も始めました。今では被災ゴミの処理は、終活へと変化しています。次世代に迷惑をかけないよう、身体が動く間に終わらせたいと思っています。

昭和四九年度卒 庄司 信子

○卒業二年後に結婚し、それから長らく専業主婦をしておりました。平成八年に夫が仕事を独立し、私も家業を手伝う事となりました。六八才となった現在も忙しい毎日を送っております。

在学当時、東洋史研究会で一緒だった女性五人の仲間とは、卒業以来ずっと二、三年に一度の旅行を続けております。子育て中も今も、私にとって学生時代に戻れる大切な時間です。

今年は思いがけない出来事がありました。平成十二年から続けてきた調停委員の仕事に対して、藍綬褒章を頂いたのです。五月には、夫と共に皇居に参内し、天皇陛下にお目に掛り、又、最高裁判所では、並居る裁判官達と親しくお話をさせて頂きました。本当に私にとって忘れられない年となりました。

昭和四九年度卒 東原 由美子

○私は日大を卒業後学部の図書館に勤めた後、三年間程学習院高等科に司書として勤務致しました。当時高等科には浩宮殿下が御在学中でした。今年五月、改元と共に新帝陛下に即位され、とても感慨深いものがありました。現在私は秋田県由利本荘市矢島町に住んでおりますが、矢島町はかつて織田信長や豊臣秀吉に仕え、讃岐十七万石を領した生駒親正の子孫高俊がお家騒動の咎により配流となった小さな城下町で、私はその生駒家の菩提寺に住んでおります。大学で専攻した東洋史では無く、日本史に触れる事の多い日常を送っております。

昭和四九年度卒 土屋 直子

○卒業して四〇年近くになりますが、史学科では古代史を専攻し、竹石先生にご教授頂いたこと懐かしく思い出されます。

また夏休み等講義のない時には、横浜市の発掘調査員として作業に携わり、非常に充実した学生生活を送りました。

卒業後は「過去」の世界から一転、東京ガス株式会社に入社し現実の社会生活の厳しさ・楽しさを学びました。結婚後は子育てに邁進。一段落した後、現在までカウンセラーとして相談者様に寄り添えるよう日々努力しています。

昭和五四年度卒 佐藤(旧姓)小林 真由美

○現在、吉川弘文館の総務部で、主に支出関連の業務に携わっています。史学科では中世史を専攻し、修士課程までお世話になりました。在学中、ゼミの卒論合宿で同輩と箱根に一泊したこと、TAの業務を通じて後輩たちから良い刺激を受けたこと、サークル活動で他学科の友人たちと交流したことは、かけがえのない思い出です。入社後は編集部に所属し、関幸彦先生の著書をはじめとして、書籍製作を担当しました。総務部に異動後も、著者の先生と関わることで、大学で得た知識・経験が仕事に活かしています。

文学部、そして史学科の今後益々の発展を祈念いたします。

平成二〇年度卒 國峯 久尚

令和元年度の史学科

人事異動

退任 坂口 明 教授（平成三二年三月三一日）

中村 順昭 教授（令和元年一〇月六日・逝去）

堀川 徹 助手 A（平成三二年四月一日）

着任 伊藤 雅之 准教授（平成三二年四月一日）

青木 学 助手（平成三二年三月三一日）

三月二十九日 ガイダンス開始（四月五日まで）

四月 二日 文理学部開講式

四月 八日 日本大学入学式（日本武道館）

四月 九日 前期授業開始（七月二十九日まで）

六月 二日 関ゼミナール・日本史演習の合同野外授業

神奈川県・鎌倉市において、関ゼミ・日本史演習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。

七月二二日 文理学部夏季オープンキャンパス

史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、加藤直人教授による特別授業「文献資料のおもしろさ―清朝史と満洲語文書―」を行いました。

七月三二日 遺跡整備調査（八月四日まで）

長野県上川村国指定史跡大深山遺跡において、調査協力依頼により、整備調査が行われ、多数の学生が参加しました。

七月三〇日 夏季休暇開始（九月一九日まで）

八月 三日 東洋史ゼミナール合同合宿（五日まで）

理学部山中湖ゼミナーハウスにおいて、加藤ゼミ、松重ゼミ、粕谷ゼミの合同合宿が行われ、二四名の学生が参加しました。

九月 二日 遺跡発掘調査（九月一〇日まで）

南中野遺跡において、考古学実地研究の野外実習が行われ、一四名の学生が参加しました。

九月一八日 後学期ガイダンス

九月二〇日 後学期授業開始（一月二五日まで）

九月二十九日 文理学部秋季オープンキャンパス

史学科では、考古学を中心とした展示を行ったほかに、森ありさ教授による特別授業「歴史史料の多様性―英軍パイロットと第一次世界大戦―」を行いました。

一一月二日 理学学部ホームカミングデー

史学科では、学術研究発表会〈史学部会〉を開催しました。また、一日から三日までの三日間に理学部部の学園祭〈桜麗祭〉が開催されました。

一二月一日 関ゼミナール・日本史基礎実習の合同野外授業

神奈川県・鎌倉市において、関ゼミ・日本史基礎実習の史跡調査のための野外授業が行われ、多数の学生が参加しました。

一二月二四日 冬季休暇開始（一月八日まで）

一月 九日 卒業論文受付開始（一月一四日まで）

一月三二日 春季休暇開始（三月二八日まで）

三月二五日 卒業式（百周年記念館）・理学部学位記伝達式

編集部より

同窓会会報は今後、ホームページでの閲覧を基本とします。
URLは下記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報ページ目記載の住所へご連絡下さい。なお、お電話での依頼は、事務局体制の事情により、恐れ入りますが遠慮いたadaきたく存じます。

〈編集後記〉

今号は紙幅の関係で、学科データ一覧と卒論題目一覧を掲載することができませんでした。かわりにホームページに掲載することを検討したいと考えております。

令和元年度 文理学部公開講座 前期テーマ「災害の歴史、災害と歴史」

- 1 遺跡に刻まれた地震と津波の痕跡
- 2 考古学でみる日本史上の火山災害と被災者
- 3 奈良時代の疫病と大仏造営
- 4 浅間山の噴火と関東の大開墾時代の到来―中世武士団の誕生―
- 5 一八四〇年代アイルランドのジャガイモ飢饉
- 6 幕末日露交渉の一エピソード―安政東海地震と洋式帆船ヘダ号の建造
- 7 室戸台風からみた昭和戦前の日本
- 8 トルコと日本からみたエルトゥールル号沈没事件



令和元年度 日本大学文理学部史学科同窓会
2019年3月2日 於:アルカディア市ヶ谷

史学科同窓会ホームページURL
<http://www.nu-hist-d.jp>